

# アクティブ・ラーニングでの学びが学生に与える影響

——PBL 型科目での外部団体とのかかわりに注目して——

徳 井 公 樹

## 【抄録】

本稿では、京都のいくつかの大学において行われている「グローバルプロジェクトマネジャー」、「初級地域公共政策士」の資格プログラムを受講している学生を対象として、資格プログラムを通してどのような学びがあり、学生に対してどのような影響があったのかを調べるため、プログラム修了生および修了予定生にインタビュー調査を行った。その結果「初級地域公共政策士」プログラムを受講している学生は充実度が高く、今後の就職や生活に対して多義的な価値観を生み出すような影響を与えていた。このような結果となった背景に、「グローバルプロジェクトマネジャー」資格プログラム受講生は、資格取得に対して消極的選択であり、また学生のプログラムに対する認識と外部団体の資格プログラムに関する認識が大きくなったことが要因ではないかと考えられる。

キーワード：アクティブ・ラーニング、PBL、グローバルプロジェクトマネジャー、初級地域公共政策士

## 1. はじめに

「アクティブ・ラーニング」（以下 AL と略記する場合がある）という単語が2012年に中央教育審議会が取りまとめた『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）』の中に政策用語として登場してから、学生の学修の環境が主体的な場になるように変化することが求められている。この背景にあるのは、社会の変化が大きくそこに対応するため教育に対する要求が変化したことがあげられる。社会の変化について、長光太志は大学への進学率の上昇から起こった「大学の大衆化」と本田由紀の「ポスト近代型能力」や経済産業省が提案した「社会人基礎力」、中央教育審議会の「学士力」などの「新しい能力」が求められるようになった「能力観のポスト近代化」という2つの変化に注目して整理している（長光2018:50-52）。アクティブ・ラーニングの実施により期待されることは、『能力観のポスト近代化』時代にマッチした人材を育成（長光2018:52）していくことである。では教育に対する要求は何か。それは溝上慎一が指摘しているように、「学校から仕事・社会へのトランジション」を円滑に行えるようにすることであろう。溝上は「もし学校から仕事

へのトランジションが、依然としてある程度成り立っていれば、きっとここまでの教育改革（ALの積極的導入）には至らなかっただろうと思う。こうして、ここまでの教育改革断行せざるを得なくなっている根源的な理由は、トランジションが十分に成り立たなくなったと社会が問題視し始め、そのうえで仕事・社会を繋ぐ学校教育を再構築せよ、として学校側に課題を突き付けているから」と指摘している（溝上 2016:12-13）。長光は「アクティブ・ラーニング」、「能力観のポスト近代化」、そして「学校からの仕事・社会へのトランジション」の概念が結び付くことで、「ALにより大学で能力観のポスト近代化に適合した人材が育成されれば、その人材は労働市場で高く評価され、結果、大学生のトランジションがより円滑化」されることに暗黙の期待が寄せられていると指摘している（長光 2018:53）。

本稿では、以上のような社会的背景および教育に対する要求を意識しながら、京都にて行われている「大学間連携共同教育推進事業」によって選定された2つのプログラム「産学公連携によるグローバル人材の育成と地域資格制度の開発（幹事校：京都産業大学）」と「地域資格制度による組織的な大学地域連携の構築と教育の現代化（幹事校：龍谷大学）」によって実施されており、京都の経済4団体と大学が協力し「教育の社会化」として人材育成を行う地域資格プログラムである「グローバルプロジェクトマネージャー（Glocal Project Manager）」（以下「GPM」と略記する）と、地域社会と大学の恒常的なパートナーシップの構築によって地域連携教育プログラムを開発し「教育の現代化」による地域資格制度「初級地域公共政策士」<sup>1)</sup>を受講した学生を対象にインタビューを行い、資格プログラムでの学びを学生自身がどのようにとらえているのか、学生に対してどのような影響を与えたのかということを中心に分析を行った。これを一つの手掛かりとして、資格プログラムを運営していく意義やその課題について検討していく。

## 2. 調査概要

本稿では資格プログラムを実践している中の2大学の学生にインタビューを行った結果をまとめた。A大学「初級地域公共政策士」資格取得者／資格取得予定者<sup>2)3)</sup>3名、B大学「初級地域公共政策士」・「GPM」資格取得者／資格取得予定者14名（内「GPM」プログラム受講生8名）に対し、インタビューないしグループインタビューで2018年1月～3月に実施した。インタビュー、グループインタビューともに60分から90分程度の半構造化面接法を実施し、発言内容をICレコーダーに録音後、全文のテープ起こしを行っている。インタビューとグループインタビューが並行しているのは、就職活動の説明会の時期であったことや学生の成果報告会などの活動があったため、学生への負担を考慮し、日程を調整したためである。筆者は、インタビューの内容がセンシティブなものではないため、学生間での相互影響は少ないであろうと考えている。

### 3. 調査結果

それでは、インタビュー調査の結果を見ていきたい。なお、以下斜字は語り部分であり、また語り部分の下線は筆者が引いたものである。

#### 3.1. 資格をどのようにして知ったのか

2つの資格プログラムの存在について、インタビューを行った多くの学生が大学入学後に行われたガイダンスなどによって認識している。インタビュー調査を行った学生の中で数人が各大学のPBL科目の存在や大学のホームページから資格の存在を認識しており、そのことが大学の志望するきっかけとなっている。

「そうですね。知ったのは、ちょうど受験前ぐらいのときの高3ぐらいですかね。それでまず、フィールドワークっていうのが、親とも進路関係の話をしてて、それでフィールドワークとか、あんた好きなんじゃない？みたいな言われて。僕、実際、ずっと研究室にこもって、ずっとパソコン触ってるっていうよりかは、外出て実際に歩いたりとかコミュニケーション取ったりするっていうのが好きやったので、親にもあんたに向いてんじゃないのみたいな感じの話をしてもらって。じゃあ、それをやってるとこはどこなんだって思っているいろいろ見てたら、一番、当時の僕の学力でちょっと頑張ったら行けるっていうのがB大やったんで。それで、そんなときはまだPBLとかこういう資格あるっていうのはまだちゃんとは知らなかったんですけど、フィールドワークをして資格が取れる程度の認識やったんですけど。それで実際入って、1回生ぐらいのときにちゃんと知ったって感じですかね。」

（Cさん [3回生] B大学／初級地域公共政策士プログラム受講生）

「僕はA大学を受験した理由に、オープンキャンパスの際に、地域で活動しているなっていうそういうイメージが頭にあって、しっかりと覚えてないんですけどそういう説明をされて、それを見てここ入って、同じように2年生のときの説明会でしたか、そのときに地域で活動しているのがあると、PBLという科目があります。それ取って、いろいろ他に授業取ると地域公共政策士っていう資格も取れますっていうのが言われてて、最初地域で活動したいと思って入ってきたんで、資格は、地域で活動できるプラスアルファ、なんか取れるんかみたいな感じで認識して取るように思いました。そんな深く考えて取ろうとは思ってはいなかったです。」

（Dさん [3回生] A大学／初級地域公共政策士プログラム受講生）

入学前に資格プログラムの存在やPBL科目があること認識したことが大学の志望動機になっ

ているということは、大学側が情報を発信していくことにより、学習意欲の高い学生を募集することの可能性が高くなると言えるのではないだろうか。また、学習意欲の高い学生が地域や企業とかかわることで双方に影響を与え、学びの場や地域や企業が発展していくと言えるであろう。

### 3.2. 資格プログラムでの学びが与えた就職活動への影響

資格プログラムでの学びが学生に与えた就職活動への影響に関して、2つの資格プログラムでの違いがでてきた。「初級地域公共政策士」プログラムを受講した学生へは大きな影響を与えていることがわかる。

「就職先は、希望なんですけど、私は旅行関係がいいなっていうのはずっとと思ってまして、E プロジェクトを通して、E 市っていう地域で活動してきたからこそ、その E 市を知ってる私が、旅行とかを通じて他の人に発信していけたらいいとか、そういうのをすごい思いしました。地域に入ったからこそ知れる何かを、新しい人につないでいきたいというか、(後略)」

(F さん [3 回生] A 大学／初級地域公共政策士プログラム受講生)

特に、就職活動を終えた4回生には、「初級地域公共政策士」プログラムでの学びが大きく影響を与えていたことがわかる。

「大学入学するころは公務員みたいなもの志望してたんです。地方自治体とかの。でも逆に地方自治体が地域にできることって限られてるような気がして、やっぱ実際民間の方とか、民間企業意外のもっと言ったら個人単位でやってる人とかのほうがこれから活躍じゃないですけど地域のためだったり、逆にほかの普通に都会でも仕事する上でたぶんそういう大きな集団じゃなくなってくるんかなっていう動きやすさみたいなもの感じましたね。興味は今までにありますけど僕はだから全然違う分野に進むことになりました。今就職とかいう意味でも。」

(G さん [4 回生] B 大学／初級地域公共政策士プログラム受講生)

「(大学に) 入る前は地元のこと全く考えてないっていう、本当に住むだけの地域だったんですよ。やっぱ関わった後ですと、僕初めて分かったのは、地元よりも H 市、I 市のほうが詳しいんですよ、めっちゃ。多分地元の名産地とか地元の地域の人の意見っていうよりも、I 市、H 市の人のほうが僕、多分本当冗談抜き、100 倍ぐらい言えるんですよ。それは結構最初のとき自慢だったんですけど、ただ今振り返ると、自慢っていうよりかは、ただ単に自分の地域のことを考えてなかっただけなんだっていうふうに気付いて、やはりこうやって

地元に戻ってきてほしいとか、でもこういった課題があるっていうの聞くと、そういう声聞いた以上、関わって聞いた以上は、自分も考える必要があるのかなっていう思いが芽生えてっていうのは、前と後の変化かなとは思います。」

（J さん [4 回生] A 大学／初級地域公共政策士プログラム受講生）

G さんや J さんはこのプログラムでの学びが、4 回生の就職活動時に当初考えていた進路ではない、違う形での進路を選択し地元や地域へのかかわり方を見つけ貢献しようとしている。

一方で「GPM」プログラムを受講した学生には就職観にネガティブな影響を与えていた。

「インターンシップに行く時点で、行く前ではすごく受け入れが歓迎されてるっていうふうにも聞いていて、積極的に受け入れてもらえるって形で聞いてたんですけど、インターンシップ初日に K 先生引率で行ったんですけど、場所が違うってことになって。うちこっちじゃなくて向こう行ってほしいねんけどって急に言われて、その時点で企業側と先生との情報がうまくいっていない、企業側もうまくちゃんと伝えてくれないっていう状態」になって、朝からタクシー使ってた、普通に戻って、どうしようってなって。行くっていう時点で、あれ、うまく情報やりとりできてないっていう感じになって、ちょっとその時点で不安だったんですけど、2 回目インターンシップに行ったときはおはようございますって言ったらあれ、きょうやつけて言われてちょっと待ってなって言われてしばらく待たされるという感じで、インターンシップに来る日自体を忘れられているってことがあって。最終的には企画の趣旨を理解していない、何度説明してもなかなか伝わらないと言いますか、言ってるんですけどやってくれないってことが多くて。求めていることを本当に歓迎して、なんで参加したんだろうってこっちが逆に聞きたいぐらいの企業だったんですね。」

（L さん [4 回生] B 大学／GPM プログラム受講生）

L さんの語りからもわかるように、大学側と企業側の連絡などがうまくいっておらず、また企業側にプログラムの趣旨もあまり伝わっていないために生じた問題であろう。また、「GPM」プログラムに関して、学生の多くが資格そのものを理解しているとは言えない状況であった。

「資格の内容をまずしっかり理解できてない状態。とりあえず資格も取れるんやったら取っとうこうで始めてるから、どういう資格かちゃんと理解せず、お金払ってるし、授業料払ってるし、取れるもん取っとけみたいないう考えでいってるから、理解できてないっていうのが。何か結構、B 大ってアナウンス系弱いんかなっていうイメージ。ほかの資格もそんな感じだったし、ほかの大学の友達とか聞いたら、就活のこととかもすごいアナウンスしてるっていうのをよく聞くけど、B 大ってそういう就活のことあんまりアナウンスしてる

イメージがない。」

(N さん [3 回生] B 大学/GPM プログラム受講生)

「GPM」プログラムに関しては、インタビューを行ったほとんどの学生が大学入学後のガイダンスで認知しており、また、資格が就職活動で有利に活用できるであろうという期待を持って参加しており、資格がどう就職活動につながるのか、あるいは有効活用できるのかをしっかりと理解している学生が少ないことがわかった。L さんは就職活動を行う際に、GPM プログラムでかかわった企業には「就職したくない」と考え、同じような業種の企業への応募は行わなかったとも語っている。

#### 4. 考察とまとめ

以上、AL 型の学びが学生にどのような影響を与えたか、資格プログラムをいつ知ったのかや就職活動に焦点を当てて学生の語りを見てきた。学生への影響に関して以下の2点にまとめた。

第一に学生が資格をいつ知るか、そして資格プログラムをどの程度理解しているかによって学生の学びの充実度が異なっている。本稿においては「初級地域公共政策士」プログラムの受講生は地域での PBL の学びや、もともと地域社会に関して興味を持っている学生が多くおり資格プログラムへの参加意欲が高いことがあげられる。一方で「GPM」プログラムの受講生は資格を取りたいというモチベーションではなく、資格を取ることで就職活動が有利に働くであろうという期待をもとに資格プログラムに参加しているということである。この学びに対する差は、実際に外部団体（地域や企業）と関わるうえで非常に重要な役割となってくるのではないだろうか。

第二に外部団体が学生にどのようにかかわるかということが学生の学びの充実度の影響に与えており、また、地域社会や企業と学生が資格プログラム終了後にどのように関わっていくかという事に影響するということがあげられる。ここで J・レイブと E・ウェンガーによって提唱された「正統的周辺参加」の概念を使って分析してみる。「正統的周辺参加」とは、「学習者は否応なく実践者の共同体に参加するのであり、また、知識や技能の習得には、新参者が共同体の社会文化的実践の十全的参加（full participation）へと移行していくこと」であり、そのプロセスに関係した概念のことである（J・レイブ・E・ウェンガー 1993:1-2）。今回の場合、学習とは資格プログラム受講者（新参者）が実践的共同体（地域社会や企業）へ参加することにより知識や技能を習得し、アイデンティティを形成していくということになる。このプロセスにおいて、実践的共同体の受け入れ態勢や方針などが学生の学びに影響を与えられられる。

「初級地域公共政策士」プログラムにおける共同体（地域社会）では、学生を受け入れる体制が整っており、十全的参加（full participation）へと移行していくことが可能であったため、学

生はかかわった地域の魅力を感じ、その魅力を発信できるような企業への就職を希望したり、学生自身の出身地に対する振り返りとなり、地元への就職へとつながっている。一方で「GPM」プログラムにおいては、共同体（企業）が資格プログラムに対する認識の違いがあり学生（新参者）と共同体のミスマッチが発生しており、この経験が就職活動を行う際にネガティブな影響（参加した企業や関連する企業の業種を避ける傾向）を与えていると言える。

ただし、本稿における考察は資格プログラムを運営している大学の一部のものであるため、以上のような結果なったことには留意が必要であろう。今後は今回取り上げることができなかった他の大学の学生のインタビューの分析を行い総合的に検討していきたい。

#### 注

- 1) この2つの資格プログラムの詳細については徳井・大東（2019）を参照のこと。
- 2) この資格プログラムの大きな特徴の一つとして大学に在学中の取得が可能であり、資格取得者と資格取得予定者の違いは、3回生終了時点で資格取得に必要な単位数を獲得しており、4回生時に、資格取得の申請を行い資格が発行される。したがって、本稿におけるインタビュー対象者で、3回生が資格取得予定者になり、4回生が資格取得者となる。

#### 文献

- 中央教育審議会，2012，『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）』
- Jane, Rave and Etienne, Wenger, 1991, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press (1993, 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加』, 産業図書)
- 溝上慎一，2016，「アクティブラーニングの背景」，溝上慎一監修／溝上慎一編『アクティブラーニングシリーズ4 高等学校におけるアクティブラーニング－理論編』，東信堂，pp.3～27
- 長光太志，2018，「アクティブラーニングが要請される社会的背景の考察」，『佛教大学総合研究所紀要』25, pp.49～55
- 徳井公樹・大東貢生，2019，「『大学間連携共同教育推進事業』における資格プログラムについて」，『佛大社会学』43, pp.51～57

#### 付記

この小論は，2019年に開催された第70回関西社会学会大会での報告を大幅に加筆修正したものである。また，2017～2019年度佛教大学総合研究所共同研究プロジェクト「大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究」による研究成果の一部である。

最後に，本研究にご協力いただいた学生の皆様にこの場を借りて感謝を申し上げます。

（とくい まさき 共同研究嘱託研究員／育成西中学校・高等学校専任講師）